

紫式部日記を貫くもの

岩 瀬 法 雲

一

日記は一条天皇の寛弘五年（一一〇八）、中宮がお産のために道長の土御門邸へ帰られ、安産祈願に大勢の僧達が詰めかけている七月頃から始まる。「秋のけはひのたつままに、土御門殿の」の例の冒頭の少しあとに、

みありさまなどの、いとさらなることなれど、うきよ^Aのなぐさまには、かかる御前をこそ、たづねまゐるべかりけれと、うつし心^Bをばひきたがへ、たとしへなく、よろづわするるにも、かつはあやしき。（朝日日本古典全書・一〇二）―日記の本文引用はこの本に拠る―

傍線A―まず作者は、この現実をどう見ていることである。うき世とは、生きるに足掛かりのない不安なこの世という意味である。油の水鳥を見て、「われもうきたる世をすぐしつづ」（一三七）というそれである。

傍線Bについて、

沈んでいる自分の現在の心（朝日日本古典全書―玉井幸助）

現実の境遇、自己の運命に対して目ざめている平常の心（岩波日本

古典文学大系―秋山虔）

正気の時とは打ってかわった（河出日本古典文学全集―松村博司）

理知や理性が正常に働いている精神状態（角川日本古典鑑賞講座―

阿部秋生）

正気と解すべき語のようである。（紫式部日記用語索引―佐伯梅友

監修）

〔以下、それらの書物から引用する場合、全書 大系 講座 索引と略称する。〕

この世を「うき世」と判断させる心である。「正気」である。「全書」は不明瞭である。源氏物語に、

母君（真木柱ノ母）もさこそひがみ給ひつれど、現心出でくる時は、口借しく憂き世と思ひ果て給ふ。（対校源氏物語新釈・若菜下・九）―「源氏」の本文引用の場合、この書物に拠る―

夢には、かの姫君（葵上）とおぼしき人のいと清らにてある所にいき

て、とかく引きまきまぐり、うつつにも似ず、猛しいかきひたぶる心
出で来て、うちかなぐるなど見え給ふこと、度かさなりにけり。あ
な心うや、げに、身を捨ててやいにけむと(六条御息所二八)現心なら
ず覚え給ふ折々あれば(葵・三四二)

ともに「正氣」であり、「本心」である。同じく嫉妬心から正常な
判断を失っていたことを自覚させた心である。

日記の作者は、今中宮の前において、平生の自分にも似ず、本心を失
った状態にあるという。人目には機嫌よく宮仕えしていることが、本
人には狂気沙汰に等しい。だから、「よろづわする」というのであ
る。作者の世界観は普通人とは逆である。

それにしても何が、作者の理性を奪ったのか。

御前にも、ちかうさぶらふ人々、はかなき物語するを、まこしめし
つつ、なやましようおはしますすべかめるを、さりげなく、もてかくさ
せ給へり。(一〇三)

廬月が近づいて、傍目にも苦しうに見える所を、心して隠してい
られる中宮の「みありさま」の「さりげな」さに感動したのである。

(こうした身だしなみに限らず、日記には、すべて人の中に処する心
のたしなみについても取り上げるところが多い)。それでも作者は陶
酔し切っていないのである。「かつはあやしき」と覚めた心がひよ
いと顔を出す。(この例もしはしば見られる)

現実を「うき世」といい、現実にかれる心を狂気という以上、作
者の「うつし心」は、出家者と同じく彼岸を願うことに傾くのは当然
である。これは日記一編を貫くもので、あたかも、夏秋の交、南方洋
上に発生した台風が次第に発達して北上を続け、われわれの本土に接
近する頃には茫大なものになって猛威を振う可能性を持っているよう
なものである。作者のその傾向は、宮仕生活の中にあつて、年月とと
もに成長して、日記の表面を見え隠れして動いている。作者は例の身
だしなみから、さりげなく書いているのだけれども。

二

「うつし心」が再び表面に顔を出すのは、物々しいお座もすみ、め
でたい若宮の誕生に、五夜、七夜、九夜とそれぞれに華やかな産養の
祝宴もすみ、祖父道長が宮のおんしとに満れて、「これぬれたるあぶ
るこそ」と喜ぶあたりも過ぎて、いよいよ近く一条天皇が土御門邸に
行幸されることになり、その準備に一門が全力を挙げている時であ
る。立派な菊の株を京中から捜し出しては邸内に植える。それが見こ
とに咲いているのは、皇室と道長一家を寿ぐかのようなのである。それを
見渡した時である。

なぞや、まして、思ふことの少しもなめなる身ならましかば、す
きずきしくも、もてなしわかやきて、消なき世をもすぐしてまし。

(一三六)

「常なき世」とは、先の「うき世」と全く同じである。「思ふ」とは「常なき世」と判断する作用である。「うつし心」の働きである。「もてなしわかや」ぐことを抑えられるのはそのためである。と、そうあつて、

めでたきこと、おもしろきことを見きくにつけても、たゞ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、ものうく、おもはずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。(同上)

「めでたきこと、おもしろきこと」をどう見せないのも同じ心で、ここでは「思ひかけたりし心」といつている。この心が強くては、官仕生活は苦しくてできない。

「思ひかけたりし心」については、

思いつめた憂愁、出家の願と決めてしまふ通説はとれない(大系)

出家道世の心(全集)

かねがね願つてゐる出家の志で、すなわち前の「うつし心」(全集)

この語は日記には今一ヶ所ある。見せ物として大勢の男の中にさらされる五節の童女を見て、作者はふとわが身を省みて、

かうまでたぢいでんとは、思ひかけきは(一七〇)

自分だつて、同じではないか。こんなにまで人中に立ち出ようとは、予想したことであつたか、とんでもない、というのである。

この語は、私のこの考察に重要な役割をもつので、なお源氏物語か

らも用例を見る。

a 吉祥天女を思ひかけむとすれば、法氣つきくすしからむこそまたわ

びしかりぬべけれ。(源木・六三)

b かすかにゐたる人(浮舟)なれば、道定も思ひかからむかし。(浮舟

・一四三)

註 思ひかけとは、道定は包宮の使のものなまゝ。それが、浮舟も淋しく暮

らしてゐるものだから、彼女に感服もするものなまゝ。

c さもありぬべき事と思ひかけばこそあらめ、あるまじき事と思ひ

取るに(浮舟・一五四)

註 右近が浮舟に、包宮になびくやうに勤めるのの対し、浮舟が、そうするの

が、いぢいぢいと思つたらたかへ、と、なまをなぢて十分わかつてゐるの

だからの意。

d ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、いつかその物思ひの絶え

むとする、と思ひかくるにはさはりどころもあるまじう、(浮舟・

一三五)

註 浮舟の心中、口致の法行に邪魔になるものなまゝでの意。

a・b・cは恋愛といつても、a・bは身分が違ひ、cは不義である。

dは自殺である。ともにとんでもない希望を表わしている。それが「思ひかけぬ」と打消になると更に明らかになる。

打ちとけて御覽せられむとは、更に思ひもかけぬ事なり。(若菜下

・六三)

註 源木が玄三哥を口説くことば。

この世にかく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪も、すこ

しからみなむや、と思す。(柏木・一三二)

註 源氏は、柏木の子をわが子として抱かねばならない運命になって、背犯した罪を悔感する云々。

日記の作者が「思ひかけたりし心」といっても、まさか自殺を計画していたとは考えられない。身分の違った恋愛か一道長には相当好感を持っていることは日記の随所に見えるが、「思ふことの少しなゆめなる身ならましければ云々」に相応しない。それでは、何か、やはり、出家を願う心である。うわべはさりげなく富仕えをしているからさういふのである。しかし、説者はここまで来て、いささか、突然な感じを持つ。それは作者の見せかけにごまかされていたからである。

さて、「思ひかけたりし心」は前の「うつし心」とどう違うか、この方はもっと積極的である。自ら働く方法も方向も持っている。仮に「うつし心のひくかたのみつよくて」と置き換えて見れば分かる。一台風はいつの間にか発達していったのである。

今昔物語に「大齋院出家のものがたり」というのがある。この院のことは日記の作者が例の中將の君のことで詳しく紹介しているが、物語の方はそれを裏付けるかのように更に具体的である。一月の良い晩秋の夜雲林院の不断の念仏会からの帰途、四、五人の殿上人が齋院に立ち寄ると、もう丑の時ばかりというのに、奥深く箏の音がする。通されて見ると、院一人手まさぐりにしていられたことが分かる。院もお喜びになり、箏や琵琶を出してお弾かせになったが、夜も明け方

になったのでお暇したというのである。これは、院の極めて晩年のことで、その後間もなく三井寺で出家なさるのであるが、こうした生活をした人に対して、当時の仏教はどう見ていたか。

現世もめでたく、をかし、くして過ぎせたまひにしかば、後生は罪深くやおはしまさむずらむと、みな思ひけるに、御行ひ緩むことなく(巻十九・三一八)

註 朝日日本古典全書、以下引用の場合はこれに拠る。

この世で豪華に風流三昧に過ごした者は往生極楽の道には障りとなるということ、日記の作者が、「めでたきこと、おもしろきことを見きくに付けても」というのと、全く同じ考え方である。日記の場合、宮廷生活に対する強い反掩から来たものであることは勿論であるが、同時に作者の当時の仏教に対する共鳴の程度が窺われる。

それでは、「思ひかけたりし心」のままに生きようというのか。

いかで、いまはなは、ものわすれしなん、思ひがひもなし、つみもふかかり(一三六)

作者は自己批判の苦しさから逃れようとして、方向転換をしようとする。「いまは」はその曲り角を表わす。(生から死への曲り角なら「いまはの時」である。)日記には「いまは」が六回ある。うち三回が他人のことで、残り三回は作者自身のことである。これはその最初のもの。「ものわすれしなん」とは「思ひかけたりし心」を忘れて、やはり素直に宮廷生活をしようということである。

方向転換を決意した作者のその後はどうであつたか。

○1 あんなに楽しそうだが、本当はとても苦しいのだと水鳥にわが身の上を見る作者、

○2 行幸の日の朝、みんなはそれぞれ張り切っているのに、一向に気乗りせぬ顔でぐずぐずしている作者、

○3 みこしを寄せた駕輿丁が息苦しく平伏しているのを見て、あれと何の変わりがあるろう、宮仕えする身は自分も同じことだと、われを見詰める作者、

○4 若宮の親王宣下に公卿たちはうち連れて拝礼に立つが、同じ藤原氏でも門流が違ふと列に入れないのだと横目で見る作者、

○5 あくる日、若宮付の家職が発表されると「かねてもさかで」と、不服顔の作者、

6 若宮御五十日の祝宴に、どうせ分かるものかと右大将災資に話しかけたりする作者、

○7 「若紫やさぶらふ」と公任から声をかけられても、「源氏の君に因わりのありそな人も見えないのに、何で紫上がいらっしゃるものですか」と、聞き流している作者、

8 祝宴が終わって退出すると、道長に捕えられ、和歌を一つよめ、よんだら放してやるとせがまれて、恐しさにとりあえず、

いかにいかがかぞへやるべきやちとせの

あまりひさしき君がみよをは

「いか」に「五十日」を詠み込んで若宮の千代八千代を寿ぐ作者、

9 「宮の御ててにて、まろわろからず。まろがむすめにて、宮わろくおはしませず。ははもまた、幸ありと思ひてわらひ給ふゆり。よいをとこはもたりかしと思ひたんぬり」(一五五)

嬉しき余つて道長の口をついて出る冗談が、歌のように調子を帯びるのを、心から同感して聞いている作者、

10 中宮は御所にお帰りになるまでにと、草子作りをされる。作者は女房達を手分けして、それを書写してもらふ。さしづめ主任役。「くばり、かつは、とち、あつめ、したたむるをやくにて、あかしくらす」と奉仕に精出す作者、

11 お帰りは十一月十七日、その前にと二三日里居する。もっさりした庭を見るにつけ、夫に死に別れてここで葬らした目のことが思い出される。明けても葬れても不安な毎日、せめてもの慰めにと物語を愛する友を求めて、意見の交換に熱中したのが、今見るとその物置りも面白くもない。心を許した友も厚顔しい女と思つてはいないかと思うと、硬りする気にもならず、向こうからも来ないので、わが家ながら来てはならぬ所に来たような気がして、やっぱり今の同僚がなつかしくなり、分けても大納言の君が恋しくなつて手紙を書く作者。

○12 しかし、書いてすぐに「なほ世にしたがふ心か」と自分を責める作者、

13 それでも、中宮がお待ちかねであることを知り、殿の上(倫子)からも「とくまゐらん」といったのにと手紙があると、「かたじけなくてまゐりぬ」と光榮がる作者、

○14 お帰りのお伴の車は右馬の中將と乗り合はすことになつていて、

身分が違ふと相手から嫌がられ、虚榮の突っ張りあいの今の生活がつくづく厭わしくなる作者。

○15いよいよ到着、下車すると月の光が明かるい。その中を、中将についてとぼとぼと行くわが後姿に肩身の狭い思いをする作者、――

以上、作者の感情の動きを日記の日付の順に拾いあげると、方向転換を決意しながら、そうは行っていないのである。十五件中○印の九件は現状に反発で、残り六件だけが同調である。それも実資に対するような例外はあるが、道長か中宮か倫子か親友に限られている。

その後、反発は同二十日、五節の舞姫の参入を見てから更に甚しくなる。行列は昼よりも明かるい松明の光を浴びて入って来る。大勢の男の目の餌食にさらけ出されているのを見ると、これがひとごとであるかと、同じ立場にあるわが身を頭みて、胸が痛む。翌日は御前の試み、舞姫の一人は気分が悪くなって行列の最前列外に出るといふ事件が起る。それを見た作者は、夢ではないかと思うほどのショックを受ける。そのまた翌日は更に童女御覧である。童女たちが出て来ると、もう胸がどきどきして、気の毒でたまらなくなる。みんな相当の家のもの、相当の練習もして来ていることだろう、それだけお互に負けまいと、かえってびくびくしているよと思うと、もう居たたまれなくなって、われながら、こんな空気にについては行けない自分を「かたくなしきや」と自嘲する。

われらをかれがやうにて、いでゐよとあらば、またさてもさまよひありくばかりにぞかし。かうまでたちいでんとは、思ひかけきやは

(一七〇)

あてが外れたというのである。これは前の「思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、ものうく、おもはずに」の「おもはずに」である。人の心は案外なもの、この調子では、自分も厚顔しさに慣れて男の見せ物にさらけ出されることになつても、何でもなくなることにしろ。そう思うと、

身のありさまの、^Aゆめのやうに思ひつづけられて、^Bあるまじきことにさへ、思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも、例の、なかりけり(一七一)

先ず傍線Bの所、

とんでもないところまで連想がのびていつて(大系)

とんでもないことにまで連想がとんで(全集)

「索引」はとりあげていず、「講座」にはこの部分がない。手許に「評註紫式部日記全釈」もないので、阿部教授の説が見られないのが残念であるが、「思ひかかりて」は前に取り上げた「思ひかく」の自動的表現で、やはり「とんでもない希望」、即ち出家の志を意味するに違いない。日記には他に用例がないが、源氏物語にはたゞ一例ある。

かやうなる(源氏)御いさまにつきて、たはふれにても、外さまの心を思ひかかるは、(夕霧)あはれに人やりならず覚え給ふ(梅枝二四一)

註 冗談にも他の女を思ふのは、やはりなせうない事と思はれる(朝日古典全書「池田亀鑑」)

実直な夕霧にはそんなことは考えるだけでもとんでもないことで、だから「たはぶれにても」とあるのである。もしもここを「連想」と置き換えたらどんなことになるだろう、第一何を連想するのとも分らない。

傍線A

前に途中列外に出た舞姫の所で「ゆめのやうに見ゆるものかな」とあつた使い方で、これも、ショックが大き過ぎたので、これが夢ではないかと思う心理である。その事柄というのは、すぐ前の「ただなれになれすぎ、ひたおもてにならんも、ことやすしかし」である。従つて、ここは、余りの恐しさに、宮仕生活をして来た現実が夢のように思われ、――真実の生活はそんな所はないと思うと、めでたい場合にもかわらず、思つてならない出家のことを思うものだから、例によつて、何一つ見えないというのである。「例の」とあるから、これは今に始まつたことではないらしい。

もっとも、岩波文庫本の本文は「思ひかかりて」の所、「思はる。かかりて」と割れている。「索引」はこの本文に拠っているので、ここを取り上げていないのを見ると、このよみ方でよいのだろうか。それなら、それでもよい。「思ひかかりて」は割れたが、上の「あるまじきことに」の中に「とんでもない」意が含まれているのだから。

その年も暮れかかつて二十九日になる。作者の心は依然として重い。始めて宮仕えに出たのはこの日であつたと當時を回想するにつけ、

「こよなくたちなれにけるも、うとましの身のほどや」(一七六)あれほど慣れることを嫌がっていたのにと後悔する。

としくれてわがよふけゆくかぜのおとに

心のうちのすさまじきかな

年も暮れ、夜も更け、わが齢も老いる、冷たい風が、空家のような胸の中を吹き通る、とつい独り言が出たと言うのである。

四

日記は次に寛弘六年に入るが、これは五年とはちがつて、記事は極めて少なく、「正月三日御戴餅」と、月日不明のもの「御堂まうで」・「源氏物語」・「」を叩く人」と、それだけである。岡一男博士は「源氏物語の基礎的研究」の中で、その内容から、――「池の浮草」・「実のついた「梅のえだ」・「くひな」と、その年の六月といわれる。これらの記事には「思ひかけたたりし心」の動きは見えないのえだのが、道長との贈答歌に、作者がどう道長を見ていたかが覗かれる。梅歌、

すきものと名にしたてれば見る人の

をらすぐるはあらじとぞおもふ

「すきもの」は、酸き物に好き者を掛ける。「をらす」は、枝を折るに女を手に入れるをかけ、一方「梅のえだ」の縁語である。作者は源氏物語の評判から好き者と悪口されていたらしく、道長の歌はそれを踏まえての冗談であることは、すぐ前に「例のすずろごとどもいできたるついでに」とあるのでも分かる。それで作者も「たれかこのす

きものぞとは口ならしけむ、めざましう」「口ならず」は、酸くて口鳴らずに人に言ひか字を掛けたもの」と、また冗談で返しながら、「めざましう」に、「そんなご冗談はご免です」という口吻が見える。「くひな」の方は、夜、道長に戸を叩かれたのだから事情は違ふ。無論明けなかつた。翌朝、道長から

よもすがらくひなよりけなくなくとぞ

まきのとぐちにたたきわびつる

これは先のような込み入った縁語や掛詞を弄していないので、道長の冗談とは見えない。とにかく好意があつたに違いない。けれども、作者の返しは、

ただならじとはかりたたくひなゆゑ

あけてはいかにくやしからまし

（「ち」は地の、「こ」と「は」の音、「たたく」は「あけ」は「は」の音）

相手の好意を掛詞や縁語をとりなし冗談で返したのである。作者がかねがね道長には好感を持っていたことは、前に触れた。だからと言ってそれに巻き込まれることはしない。作者は常に不即不離である。この世を「うき世」といひ「常なき世」といひ作者には、男の心は何もかも分り切つていた。—こんなところにも「思ひかけたりし心」は予定の進路を進めていたのである。

この年は、日記としてはそれだけであるが、その代り、正月三日の記事に続いて例の消息文といわれる長いものがある。混入か否かはともかくとして、日記が記事の当時に書かれたものでないことは、次の

書き方一つでも分かる。

かばかりのことの、うちおもひいでらるるもあり、そのをりは、をかしきことの、すぎぬればわするるもあるは、いかなるぞ（一〇五）

しかし、後から書いても人物や服飾などの細かなメモを材料に、すべて当時の目で月日を追つて再現したに違いない。感想の方も同じで、「いまは」の使用例でも分かる。岡博士によると、「紫式部日記は、寛弘七年の夏頃著されたと見てよい」らしく、例の消息文（手簡）については、種々な点から、「この日記中、最も新しい式部の環境を—換言すれば、日記成立当時の彼女の感想を知りうるのは、手簡の部分である」といわれる。仮に、その説を受け入れないものがあったても、日記は六年以上に七年の記事は簡單で、正月三箇日の「宮たちの御臈餅」、二日の「中宮の臨時客」、十五日の「二の宮の御五十日」、それだけで、それも、「思ひかけたりし心」のことが見えないので、それを考察するものには、「消息文」は、やはり作者の内情を知るに最も新しいものといふことになる。

「消息文」は、「人々のかたち」として宰相の君を始め宮の女房十人をあげ、次に「人々の心ばせ」、一例の齋院の中將の君を論評し、齋院・中宮それぞれの女房の比較から、和泉式部、赤染衛門、清少納言に及ぶ銚先の鋭いもの、その清少納言の途中から銚先は次第に自分に向き、次の「わが身のありさま」で奥深く割り入る。その終わりは、

人中に処する処し方として、多分に自戒の色を得びながら、次の「口もちことごとしき人」「つらき人」へと続く。「日本紀の局」、「楽府進講」はその自戒の工夫、それが遂に一転して「求道の思ひ」の告白となり、この頂点から、筆は直ちに「結び」となる。その中、この考察に手懸かりとなるのは、「わか身のありさま」と「求道の思ひ」とである。

つれづれに持て余して、亡夫も読んだ漢籍を手にする、侍女達が「おんまへは、かくおはずれば、おんさいはひは、すくなきなり。なでふ女が、まんなぶみはよむ。むかしは、経をよむをたに、人は制しき」と言っていると聞いて、とにかく止める。またいくらつれづれだといつても、人が仏いじりに身を入れ、念仏だ、読経だ、回向だ（まう）とやっているを見ると、やはり嫌らしく思われるので、したくても侍女達を憚おそってしない。人中では言いたいことがあつても、どうせ言つてもとだまっている。こうして、すっかり「はけられたる人」になりすましている。ところが、同僚たちはいう。

「かうはおしはからざりき。いと飽あに、はづかしく、人に見えにくげに、そぼそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさんとなん、みな人々思ひつにつにくみしを、見るには、あやしきまでおいらかに、ことびとかとなんおぼゆる」(二〇三)

傍線初めの十語は、人中での姿勢、それらは誰よりも作者自身嫌う

ものであることは、齋院の中將の君や清少納言を攻める時の対象になつたもので、人目には作者もそう見られていたのである。ところで、作者の自戒は完全に成功した。傍線Aがそれである。しかし、そう見られることは、やはり気がひけたと見えて、「みないひはべるに、はづかしく」といつている。それに成り切ることを無上の喜びとしたもろもろの聖たちの心境とは違ふ。寧ろ不服でもあつたことは、それを「人にかう、おいそげものと、見おとされにける」と取つたことでも分かる。しかし、すぐ勇氣をとりもどして、

ただこれぞわが心と、ならひもてなしはべる(二〇三)

「わが心」は「私の望み」(謙遜)で、「自分の性質」(全世)ではない。「ただこれこそ自分が心から進んでわざと振舞っている態度」(全世)で、前の「いまはなほ、ものわずれしなん」の首尾である。

それを言つたのは、五年十一月、行幸準備の頃であつた。その年は前述の通りまだまだそれは行かなかつたのが、七、八年の夏近くには、ここまで来ていたので、平常の工夫が隠然と積まれていたことが分かる。中宮に楽府を進講しながら、他人には漢字は「一」の字も書けない顔をしたりするなど、作者のような優れた知識人には、その見せかけは苦行にも等しかつたことを見逃がしてはならない。しかし、作者の仮面にいわれる無の媒介がない以上、結局安易な妥協であり、自己欺瞞にすぎない。自分の魂よりも他人の目を本位に、いつも緊張していなければならぬことは、自己批判の強い作者だけに堪えら

れるものではない。あれだけの忍苦を続けて来たが、とうとう「すべ、世の中、ことわざしげく、うきものにはべりけり」（二〇八）と、悲鳴をあげてしまったのである。

五

いかに、今は、こといみしはべらじ。人はといふとも、かくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひはべらん。（二〇八）

方向転換を表わす第二回目の「今は」がこれである。尤もこれは、直接には消息文中の仮面生活を受けてのことばであるが、その仮面生活は、日記の「今は、なほ、ものわすれしなん」の実現なのだから、内面的には、日記のそれを受けたものと見て差支えないはずである。

「こといみ」とは元日の朝、昨夜の泥棒の話をしような（二八〇）、舞姫のパレードを見ながら、出家を願うような（二七一）、すべてめでたいときに、不吉に渡ることを慎むことである。舞姫の方には「ゆゆしく」とあるが、いうまでもなく「いみ」を形容詞にしたもので、ここでは同じである。要するに縁起をかつぐことである。世俗に従う心から起る。今の作者には、もうそんなことも構っていられなくなつた。差し迫つた気持が、次の「ただ」が表わす。

ところで、傍線Aの所、

怠りなく経をお習いしましょう（大系）

阿弥陀仏に熱心にお経を習いましょう（全集）

阿弥陀仏に油断なくお経をならいましょう（講座）

「全書」、「索引」は取りあげていないが、従来ここは、諸註「たゆみなく」を「ならひはべらん」にかけて修飾語に見ているようだが、しかし、「阿弥陀仏にたゆみなく」と切れないものであろうか。仏に専心、即ち念仏に怠りなくである。従つてそこは、念仏と誦経とをいうのである。諸註では阿弥陀仏を師として経を習うようだが、それは仏教の常識が許さないであろう。「見仏聞法」というように、仏には法を聞くということはあるが経を習うということはない。釈迦の滅後、弟子たちが法を文字にしたのが経だからである。経を習うに師を要するなら、僧である。仏と法と僧は、それぞれに職掌が異なる。これは仏教のABCに属する。仏教に関心の深い作者が誤るはずがない。今昔物語には「罪業によつて、（中略）ひとへに心を至して法華經を誦し、弥陀の念仏を唱へて極楽に往生せんことを願ふ」（巻十五・二九一）というような例は、枚挙に暇がない。経は法華經、仏は阿弥陀というものが、まだ叡山を出ない当時の浄土信仰のあり方であった。

世のいとほしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、ひじりにならんに、懈怠すべうもはべらず（二〇九）

「ひじり」については、「全書」も「全集」も「大系」もみな「出家」とあるが、これは、「仏者であると否とはとわず、世俗の欲にとられない人をいうらしい」（講座）によるべきである。

「ひじり」はまた「聖人」ともいう。当時、宮廷権門に出入することを光榮に心得ていた所謂僧正・僧都・律師の一群に対して、別に、

寧ろそれに反発した修行一途の人たちがあった。それが「ひじり」である。その代表的な人たちは、よく餓えと欠乏に堪え、燃えるような信仰心のまにまに行動した。山林にもいた、人里にもいた、市中にもいた。

自ら渡し守りとなって旅人の難波を救い、また孤児病人の收容所に常に物を運んだ「理濟聖人」(今昔物語卷十三・四六)

四人を救うため、自ら泥棒となって博徒の群れに投じ、入獄して彼等を慰めた「春朝聖人」(同卷十三・四九)

山間にあつて昼は屠殺に雇われて妻を養い、夜は専ら誦經と念仏に生涯をかけた「淨尊聖人」(同卷十五・二八五)

聖人の中温和な代表は横川の源信(卷十五・三〇四、卷十四・二〇九)憂快な代表は多武峰の増賀(卷十九・三一八)であろう。源信は僧部であつたが、彼の面目は「ひじり」にあつた。三条の太后の御八講に召された喜びを母に知らせ、「かく名僧にて花やかにあるさまはむは本意に違ふことなり。われ年老いぬ。生きたらむほどに、聖人にしておはせむを心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか」(卷十五・三〇五)と諫められ、再出發する話でも分かる。当時仏教徒の理想に「名僧」と「聖人」の別があつたことは、母のその手紙が示している。日記の作者もそういう世の中に生きていた人である。この作者が仏道修行に後者を選んでゐたことは、いかに作者の「思ひかけたらし心」が本質的なものであり、高度なものであつたかが覗かれるのではないか。しかも今の自分はそうした峻厳な生活にも怠るはずもないと言ふのだから、「思ひかけたのし心」は炎をあげて燃えている。作

者の長い仮面のための忍苦は、そのよい準備であつたらう。

ただひたみにそむきても、くもにのぼらぬほどの、たゆたふべきやうなはべるべかんなる。それにやすらひはべるなり(二〇九)

「たゆたふ」は、行幸の朝の気持を表わすのに作者は、「さいふとも日たけなんと、たゆき心ども(小少将ト二人)は、たゆたひて」(一三八)と、この語を使つてゐる。角川古語辭典の「漂つて進まない。揺れて定まらない。―大船のためたふ見れば(万一九六)」とあるのに当る。

「やすらひ」は、日記にもう一箇所ある。五節のところである。「ものうければ、しばしやすらひ、ありさまにしたがひてまゐらむとおもひ」(一六八)と、舞姫は見たくないので日和見する気持に使つてゐるので語義は一層明らかである。

さて、日記の意味は、たとえ今一筋に出家して見たところで、死ぬまでは動揺するわけがあるといわれている。それで日和見をしてゐるのですといふのである。「なる」は伝聞推定であるが、自己批判の嚴しい作者には十分その裏付けがあつたに違いない。源氏物語に、

今は、この世にうしろめたき事残らずなりぬ。ひたみちに行ひにおもむきなむに、さきはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心感ひにては、願はむ道にも入りがたくやと、ややまじきを、この思ひすこしなめに忘れさせ給へと、阿弥陀仏を急じ奉り給ふ。(御

紫上を死なした源氏の心中である。傍線Aは、結局紫上に対する大きな執着である。人間の人間たるところであるが、これが出家を妨げる。もし強いてすれば、必ず出家の道に動揺する。日記の「たゆたふべきやう」はこの執着に当る。作者はよく知っているのである。傍線Bは日記の「やすらひはべる」に当り、更に溯って「ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらん」に当る。出家を後廻しにして、その代り専心念仏誦経をというのである。今昔物語、越中の前司藤原仲連の語に、

常には出家の思ひありといへども、忽ちに妻子を棄て難きによりて、思ひをかけながらおのづから過しけり。一寸の暇を借しみて法華経を説誦し仏の名号を唱へけり(十五卷・三二一)
 当時この類いが少なくなかったのである。日記の、

^Aとしはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれよりおいほれて、はためつらにぞ経よます、心もいとたゆまきまさはべらんものを。^B心ふかき人まねのやうにはべれど、今はただ、^Cかかるとのことぞ思ひ給ふる。(二〇九)

傍線Aの所、
 年齢もまた出家するのに恰好な程度に(大系)

出家してもよい程に(全書)

年の方も出家するにちようどよい年配に(全集)

年齢的にも、出家していいほどに(講座)

みな「出家」とみているが、死ぬまでは真実の出家はむつかしいと既に言っているのであるから、これはそれをせずとも出来る「誦経」のことをいうのである。「ゆづらにぞ経よます」というのはそのためである。

傍線Bは、従って持経者である。この中に「聖人」がいることは、先の理満や春朝のことを、本文には「聖人」とあるが、表題には「理満持経者」、「春朝持経者」とある。傍線Cは、持経者のまねをして法華経を説誦することである。ところで、その上の「今は」は、第三回目のそれであるが、内容は第二回目と同じである。誦経生活を強調するために繰り返したのである。作者は求道心のたならぬさまを告白しているわけである。しかし、最後に、「それ」と聞き直って、静かに俯き加減ででもいうことは、

^Aつみふかき人は、また、かならずしもかなひはべらじ。^Bさきの世し^Cらるることのみ、おほくはべれば、よろづにつけてぞ悲しうはべる。(同上)

傍線Aの「人」は、罪業深きを自覚する自分である。「人」を自分のことに使う例は、「わが身のありさま」を回顧して、「とるべきことなくて、すぐしはべりぬる人」(一九九)という所にもある。

傍線Bについては、「出家の素志」(全書)(全集)とあるが、作

者は既に出家の代りに在俗のまままでの持経者をしていつているのであるから、やはり、「極楽往生の願い」(大系)、「往生を願って」(講座)である。―出家には自信がない、持経者をまねても、必ずしも往生極楽は保障されないとなると、一体作者はどうすればよいというのだろうか。折角生きる手懸かりを捕えたかと思う瞬間に脱け出して行こうとする。傍線Cの作者の深い嘆息がうなづかれる。「ひしり」の生活にも堪え得られると言った作者に出家を拒んだものは、実はこのCの深い宿業に根ざすものであったのである。―一時は猛威を振うかに見えた台風も、今は静かに冷たい北の海を北上する。

六

日記の特色の一つとして他人を批評するが、結果的には自分を責める前ぶれになっていることである。齋院の中將の君、和泉式部、清少納言と、相手を痛烈に責めたため、説者は、思いがけなく作者自身の内面を奥深く聞くことができた。

消息文を終るに当って、作者は、

けしからぬ人^Aを思ひきこえさすとも、かかるべきことやははべる。(二一〇)

と、自分に人を責める資格のないことを言い、更に、

かく、世の人ごとうへを思ひ思ひて、はてにとぢめはべれば、身^Cを思ひすてぬ心の、さもふかうはべるべきかな。なにせんとにかは^D

べらん。(二一一)

傍線BはAと同様人を責めたことを意味する。Cは、宿業に催される執着の深さを思うと、人のことを言っているところではないとの反省、Dには自分の無力さを思い知る深い溜息が聞こえる。

作者を痛ましめるこの宿業感とは、作者の深い反省に根ざすもので、日記以前から既に作者に固有するものであった。それは「うつし心」から生まれ、「思ひかけたりし心」を生んだ。それはまた作者の人間観をさまざまな面で個性的なものにしている。

一人人の世に生きると言うことは、仏教流に言えば、人それぞれに宿業の重荷を負って歩く外にはないであろう。自分だけは違ふといった顔して、振り舞うものだから、作者は、中將の君や清少納言をあれほど非難したのである。「おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思ひたまへられしか」(一八九)と、公憤さえ感じるのであった。だから黙々と忍従して行く者には、深い同情を禁じ得なかった。水鳥、鴛鴦丁、舞姫とその童女、神楽の人長かねとき(一七六)、相手は誰でもよい。この広い同情は、日記の特色その二と言える。結局非難の半面で、根は一つである。

特色その三は、人の、世にあるあり方である。作者はそれを「おいらか」と言う。

すべて人は、おいらかに、すこし心おきてのど、やかに、おちひぬるを、もとしてこそ、ゆゑもよしむ、をかしく、うしろやすけれ。

(二一〇三)

これはもともと作者が、仮面生活の中にあつて言つたものであるが、今後宿業感が深まるに従い、その意義を再発見することになるであらう。かつて作者は、「うき世」「常なき世」と割り切つたが、さて、いよいよ自分にさし伸べられる救済の手も容易でないことを知れば、作者には自分の居り場所は、その「うき世」より外にないはずである。作者は「おいそげものと見おとされ」（二〇三）たといつて落ばなかつた時ではあつたが、直感的にはその持つ正しい意義を見通していたのである。だからこそあの時、「ただこれぞわが心」と、思い直し、のみならず高所から、「すべて人は」と、大胆に発言することができたのである。作者は自分の努力で、人から「見るには、あやしきまでおいらかに、ことびとか」と思われるまでになつた。その見せかけを知らない同僚に気まり悪さを覚えたが、既に源氏物語に造型していた主要人物、例えば紫上や宇治の中君の行動は、「おいらか」さに終始させていることは何を意味するか。源氏が亡き紫上を追回して限らない思慕をこめる点は、

いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らし給へりけるを引き隠して、せめて粉らはし給へりし程の用愁などを（幻・三三三）

女三宮を迎えた頃のことである。「おいらか」な上にも「おいらか」にと努力する所が傍線のことばに見える。

匂宮に疎んぜられ、薫には惱まされる中君が、

世の中いと所せう思ひなられて、なほいと憂き身なりけりと、ただ

消えぬ程は、あるにまかせて、おいらかならむ、と思ひ果せて、い
とらうたげに、心うつくしきさまにもてなして届給へれば（宿木・
二七一）

Aの認識がBの方法を生み、Cでは悟りかと思われるほどの朗らかさを実現するまでになつてゐることを表わす。袖をぬらして泣いていた紫上とは遙かに異なる心境である。（こんな所にも源氏物語の第二部から第三部への展開が見えるような気がする）

それはとにかく、日記の作者は、この「おいらか」さを高く評価し魅力さえ感じていたことは、日記の冒頭、「なやまし」さを、「さりげなくもてかくさ」れる中宮の姿勢に、「うつし心」を忘れるほどであるとき出したことでも分かる。以上、特色の一、二、三は、みな「思ひかけたりし心」同様、作者の宿業感に根を持つものである。

宿業の自覚はますます作者を現実の歴史の中にしつかりとおく結果となる。気の弱い者の環境への妥協とは異なる。そこから、既にあの長い源氏物語を飽かず書き続けていたことも考えられる。

日記を貫くものとして、私は専ら「思ひかけたりし心」を追究した。それは日記の叙述の形に従つたからである。しかし、今それを一応終えて、それを支えていたものに初めから宿業感のあつたことを知り、急に日記の全面が明かるくなつたような気がする。のみならず、改めて源氏物語との関係も考えられるようになった。

終わりに未熟な者が、先学諸家の研究に教えられながら、それをあげつらつたことを深く謝する。